

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 解 良 優 基

論 文 題 目

学業場面における課題価値の機能と規定因の検討
—課題価値の多面性に着目して—

論文審査担当者

主 査	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	中谷素之
	名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授	氏家達夫
	名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授	清河幸子

論文審査の結果の要旨

近年、学習動機づけ概念の中で、特に課題価値 (task value) という概念的枠組みが注目されている。「面白さ」や「興味」といった内発的動機づけの考え方だけでなく、「課題を行うことによる価値」に注目した課題価値の概念は、児童・生徒の学習や達成行動をよりよく理解するための有益な視点であるといえる。

本論文の主な目的は、課題価値研究の経緯に基づきながら、児童・生徒の課題価値認知に対する教師および親の働きかけを通じた学習動機づけ促進のプロセスについて検討することにあつた。課題価値は、個人が認知する学習課題に対する価値づけを指す概念である。本論文では、わが国の児童・生徒のもつ学習動機づけ上の悩みとして学びの意義や価値に対する認識の低さという問題に焦点を当て、親や教師によるどのような介入がどのように子どもたちの課題価値の認知を媒介し、学習行動へと影響するのかについて実証的に検討を行った。

第1章では、課題価値に関連する先行研究を概観し、問題の所在を指摘したうえで本論文の目的を示した。課題価値という概念の理論的背景について概観し、アトキンソンの古典的な期待—価値理論からエックレスらの現代的な期待—価値理論への変遷を示し、自己決定理論や達成目標理論などの主要な動機づけ理論との対比に基づき、動機づけ研究における課題価値の理論的な位置づけを示した。

第2章では、課題価値の具体的内容に注目し、中学生の理科においてポジティブな課題価値の側面の質的な違いが、児童・生徒の学習行動にどのような異なる影響を及ぼすのかについて検討を行った。わが国の中学生を対象にポジティブな課題価値認知を評定する尺度作成を行い、また個人のもつ達成目標志向性との関連から、作成された尺度の信頼性と妥当性が示された。その上で、研究1ではポジティブな課題価値の各側面はそれぞれ異なる形で生徒の学習行動に影響を及ぼしていることが示唆された。研究2では、ポジティブな課題価値の諸側面が理科学習へのエンゲージメントに及ぼす影響について小中高校生を対象に検討した。重回帰分析の結果、興味価値と制度的利用価値において学年との交互作用効果がみられ、学年の高い場合に興味価値と制度的利用価値のエンゲージメントへの効果は強いことが示唆された。以上の研究より、課題価値の各下位尺度はそれぞれ異なる特徴をもつことが明らかにされた。

論文審査の結果の要旨

第3章では、課題価値の各側面の規定因として、親や教師など子どもにとっての身近な大人（社会化エージェント）の意識や行動に着目している。研究3では、それぞれ中学生と高校生を対象に、認知された課題価値の教授と生徒のポジティブな課題価値評定との関連について検討を行った。その結果、中高生ともに学習内容を子どもたちの日常生活と結びつけるような実践的利用価値の教授を行うことが、生徒にとっては複数の課題価値の認知を促進することが示唆された。研究4では、中学生の親子を対象に、母親の信念が母親の行動を媒介し、子どもの課題価値の認知に影響を及ぼすという課題価値の伝達プロセスにおいて、母親の認知する子どもの学業能力に対する期待の高低がこれらのプロセスを調整するという仮説の検証を行った。母親の期待が高い場合、母親が理科に対して認知する課題価値は、子どもの勉強への関与行動を媒介して子どものポジティブな課題価値の認知に影響することが明らかになった。

第4章では、ポジティブな課題価値のみでなく、ネガティブな価値的側面であるコストも含めて統合的に扱い、学習行動への影響について検討した。研究5ではわが国の中学生を対象に行われた社会調査によって得られたデータをもとにし、コストと同様に学習回避動機である学習上の悩みと、利用価値の認知の2変数を扱い、利用価値を高く認知すると同時に学習上の悩みについても高く感じている葛藤認知群の存在が示された。また、研究6では大学生を対象に、3種類のコストと興味価値についてそれぞれ学習の持続性に対する交互作用効果がみられるかどうかを検討した。その結果、必要な努力量の認知を指す努力コストについては交互作用効果がみられ、努力コストの高さはポジティブな価値と結びつくことによって学習の持続性に促進的な影響を示した。

第5章では、これまでの研究によって得られた内容について総括し、本論文の意義と今後の課題・展望が議論された。

論文審査の結果の要旨

以上の論文の内容に対して、審査者からは、以下のような指摘がなされた。

1. 課題価値の複数の新たな下位概念から実証した点は興味深いですが、下位尺度間関連も比較的高くそれぞれの独自の影響がどの程度示せたといえるか。
2. コストの3つの下位尺度は同等のレベルのものだといえるか。「努力コスト」の概念は、課題達成の客観的な見積りなのではないか。
3. 第2章研究2において、理科に注目した課題価値認知を測定しているが、理科や“サイエンス”の概念は実用性よりもむしろ普遍的な真理追求であり、日常場面から乖離してとらえられる可能性もあるのではないか。
4. 課題価値が教師や親から児童・生徒に影響するプロセスについて検討し、その意義は理解できるが、そこには必ずしも一方向的な影響ばかりでないこともあるのではないか。発達段階や文化、社会的背景によって、また影響の与え手と受け手の間の交互作用によって影響そのものが異なる可能性もあり、そのような視点についても視野に入れるべきではないか。
5. 教育における“実用”価値は最善のものといえるか。役立つことが誘因となることはむしろ手段的・短期的であり本質的でない可能性があるのではないか。

これらの指摘に対して、論文申請者はその意味を十分理解し、その上で、研究および理論の内容を踏まえ論理的かつ主張的に回答した。

上記のような課題も考えられるものの、本論文の内容は、学習動機づけの課題価値研究において、従来の研究では不足していた重要な視点、すなわち 1. 課題価値研究を多面的な視点から新たに概念化し、その効果について実証的な検討を行っていること、2. ポジティブな課題価値とコストを同時に扱い、動機づけの葛藤という現象に注目していること 3. 教師や親が児童・生徒の課題価値をどのように促しているかという社会化のプロセスを実証的に明らかにしていること という独自性をもつ意義ある論文であると評価できる。そのため審査者は全員一致して「可」と判断した。